

ライバルとの競争の結果に対する原因帰属・対処方略に関する検討

A study of causal attribution and coping strategy to a competition result with a rival

太田 伸幸
Nobuyuki OTA

Abstract This study examine causal attribution, and coping strategies within a competitive learning situation in the presence of a rival. Among 486 high school students who cooperated, 192 students had a rival and 292 did not. Students were asked to report on their own characteristics, their rival/friend's characteristics, and items dealing with their causal attribution, and coping strategies toward the outcome of a competitive learning situation. Factor analysis extracted three factors for causal attribution: partner's attributes, fate, and personal effort. Two factors for coping strategy were also extracted: positive strategy, and negative strategy. Rivals were categorized into "performance standard", "ideal goal", or "good match". Those who did not have a rival reported about a friend. Multiple linear regression analysis was conducted, revealing that even if there was a negative competitive outcome with a rival, positive coping strategies were adopted more for the rival than a friend, with reference to rivals categorized as ideal goal, and good match. It appeared that the presence of a rival facilitated the student's autonomous motivation, and enhanced their positive attitudes toward study.

1. 問題

1.1 はじめに

“ライバル”という用語は、スポーツや仕事などで競っている人々に対してよく用いられる。本人が「ライバルはあの人です」と述べることもあるし、周りから見て、「あの二人はライバルだ」と表現することもある。例えば、Deutsch (1982), Wish, Deutsch, & Kaplan (1976) は仕事上の営業成績を競う関係をライバルと表現している。また、DeSteno & Salovey (1996), White (1981) は、恋愛において特定の相手をめぐって競う関係をライバルと表現している。このどちらの場面でも、どちらか一方しか達成し得ない1つの目標に対して競争している関係に対して“ライバル”という用語が用いられている。しかも、これらは全て競争関係としてだけでなく、敵対関係としてもとらえている。しかし、一つのことに競いあっているからといって、全ての競争関係にある二者にライバルという表現を用いるわけではない。“ライバル”という表現を用いる基準を、個人ごとに内在化させていると考えられる。

1.2 客観的にライバルと認知される関係 (太田, 2000a)

太田 (2000a) は大学生の自由記述を基に、ライバル関係の典型例を「勝負重視の関係」、「公私共に競っている関係」、「犬猿の仲」の3つに分類した。この内、「犬猿の仲」のみが敵対関係としてとらえられる関係であり、全てのライバル関係が敵対関係としてとらえられるわけではないことを示している。さらに太田はライバル関係の認知基準について、ライバルが協同関係や友好関係として認知されている可能性を示唆した。太田 (2000a) はライバルに関する認識、個人に潜在的に存在するライバル像を“ライバル観”と定義し、この定義に基づき、どのような関係をライバルとして認知するかについて測定するライバル観尺度を作成した (太田, 2004a)。ライバル観尺度は協同関係として認知される「相互作用」、競争関係として認知される「競争意識」、能力の対等性や立場の対照性を示す「対等性・対照性」から構成される。因子間相関は無相関～弱い正の相関を示しており、協同関係も競争関係も同時に強く基準として認知される可能性を示唆している。

1.3 実際に認知されているライバル

室山 (1995) は大学生を対象にこれまでに認知したこ

とがあるライバルについての面接調査を実施し、「課題を媒介として競争する相手で、実力が同程度であり、競争によってお互いに良い影響を及ぼしあう相手」とライバルを定義した。この定義は、ただ競争するだけの関係をライバルとして認知することは難しいことを表わしている。また、ライバルとの関係についても、室山 (1995) や太田 (2000b) などが分類している。どちらにおいても、友人関係や親友関係に分類されるような相手をライバルとして認知しており、実際のライバル関係においても敵対関係としてとらえられるような関係をライバルとして認知されているわけではない。また、太田 (1999) は、実際のライバルに対する意識とライバルを持たない生徒のライバル像を比較した結果、ライバルを持たない生徒が考えている以上に仲が良い相手をライバルとして認知していることを明らかにしている。

太田 (2000b) は、高校生に対して質問紙調査を実施し、学習におけるライバルの人物像を 4 類型 (好敵手、目標、基準、比較の対象) に分類した。この類型の中で、室山の定義しているライバルに相当するのは「好敵手」のみである。他の 3 類型は、実力が同程度でない場合や一方的にライバル認知を行なっている場合である。したがって、この 3 類型では室山の定義にあるような「お互いに良い影響を及ぼしあう」ということは考えにくい。確かに室山自身のデータにおいても、太田の分類においても多くの例外が存在しているため、室山の定義は代表的なライバルについての定義であるといえよう。したがって、実際に認知されるライバル自体に認知する対象の個人差が存在するため、室山のライバルの定義だけではライバルとはどういう存在かという検討は不十分であろう。

1・4 ライバルの認知理由—社会的比較理論からの仮説—

学習場面においては、生徒自身も、ライバルに限らず他者と比較することによって自分の能力を評価しようとしている。こうした比較は、Festinger (1954) の社会的比較理論 (social comparison theory) によれば、自分と類似した他者が比較の対象になることが多い。類似した他者への比較の生起には、単に能力が類似しているだけでなく、両者がおかれている状況 (立場、所属する集団等) が同じであることも必要となる (高田, 1981)。生徒にとって学校は、この条件を満たす場であり、生徒が社会的比較の対象を身近な生徒に求めることは必然であろう。

太田 (2000b) の 4 類型で表わされるライバルの類型を社会的比較理論の枠組みでとらえると、双方向の競争関係は、能力の社会的比較における向上性の圧力 (能力の社会的比較には競争が伴う (高田, 1992)) から、一

方的にライバルを意識する場合は Latané (1966) の自己高揚の比較から、それぞれ説明が可能である。しかし、同様な社会的比較過程が生起していたとしても、全ての生徒が一様にライバルとして相手を認知しているとは限らない。また、そうした社会的比較過程が実際に生起しているかどうかについても明らかではない。

1・5 ライバルの類型化とそれぞれの認知理由 (太田, 2001)

太田 (2001) は高校生を対象にライバルの認知理由について検討し、「相互作用」、「目標の対象」、「親近性」、「能力対等」の 4 因子を抽出した。次に太田 (2000b) を参考に、ライバルとの成績差の認知とライバル意識の方向性を基にライバルを「基準」、「目標」、「好敵手」に分類した。以下に各類型の特徴を示す。

- 1) 基準 : 自分より成績が低い生徒、または同等の生徒をライバルとして意識している。ライバル意識は一方的である。
- 2) 目標 : 自分よりも成績が上の人物をライバルとして意識している。ライバル意識は「基準」と同じく一方的である。
- 3) 好敵手 : 成績にそれほど差のない人物をライバルとして意識している。ライバルとしてお互いに意識している。

そして、類型によるライバルの認知理由の違いについて、判別分析を用いて「類似性」と「相互性」で類型ごとの認知理由が説明されることを明らかにした。

1・6 ライバルの認知理由の構造—SEMモデルを用いた検討—

太田 (2001) の認知理由において、「相互作用」に含まれる項目を見ると、ライバルが存在すると動機づけが高まるとか、共に向上するといった信念を持つことが、ライバルを認知する要因として重要な位置を占めている。しかし、判別分析の結果からは、この意識を反映していると考えられる「相互性」の軸において、「好敵手」と「基準」に有意差が認められた。このことについては Tesser, Campbell, & Smith (1984) が提唱した自己評価維持モデル (self-evaluation maintenance model; SEM モデル) から説明が可能であろう。

SEM モデルは、比較する他者との心理的な近さ、他者の遂行および自分の遂行の認知もしくは遂行そのもの、比較の対象に対する関与度の高さを変化させることによって、個人の自己評価を維持、あるいは高めようとする過程をモデル化したものである。自己評価を維持するための方略には、例えば他者との心理的近さを遠くする

(Pleban & Tesser, 1981), 学習に対する関与度を低下させる (Tesser & Paulhus, 1983), 相手の遂行を歪曲させて認知する (Tesser et al., 1984), 自分の遂行を上昇させる (磯崎・高橋, 1993) などがあげられる。学習場面において, 自分にとって関与度が高い教科については, 心理的に近い他者よりも学業成績が上であると認知し, 関与度が低い教科については, 心理的に近い他者が上であると認知しやすい (磯崎・高橋, 1988; 桜井, 1992; Tesser et al., 1984)。これは, 自己評価が低下するのを避けるために自分の認知を変容させる (Tesser et al., 1984), もしくは自己評価を低下させない相手を友人として選択している (磯崎・高橋, 1988) ことを示す。しかし, 磯崎・高橋 (1993) は, 友人選択と学業成績の関連の時系列的変化について検討し, 認知的歪曲による自己評価の維持は学期が進むにつれて弱まり, 実際の成績で自己評価を維持しようとする傾向があることを明らかにした。すなわち, 関与度が高い教科については, 自分が高い達成をすることで自己評価を維持するのである。

類型ごとの認知理由の差には, 生徒自身の対処方略選択の傾向が影響していると考えられる。「好敵手」では, ライバルとの相互的な競争関係を築いており, 相手に勝つために自分の遂行を上昇させる方略を選択する。「目標」では, 相互性の値にばらつきが大きく, 他の類型よりも個人差が大きい (太田, 2001)。これは, もともとライバルと能力差があるため, 他の類型に比べて比較過程による影響が少ないためであろう。ただ, 成績が上の相手との比較は自己高揚の比較である (Latané, 1966) ため, ライバルとの差を縮めることで自己評価を高めようとする (自分の遂行を高める) 方略を選択しやすいと考えられる。そして「基準」では, 自己評価の維持に対する影響を少なくするため, 他者との心理的近さを遠くする方略, もしくは始めから心理的に遠い他者をライバルとして認知する方略を選択することが考えられる。しかし, ライバルの類型による対処方略の違いは, 認知理由からの推測であり, 実証されているわけではない。そのため, ライバルの存在の影響やライバルとの競争における生徒の意識, 対処方略について検討する必要がある。

1・7 ライバルの類型・友人に対する競争意識のSEMモデルを用いた検討 (太田, 2004b)

太田 (2004b) は, 比較過程から本人とライバルの競争意識にもたらされる影響についてのモデルを仮定し, パス解析を用いて検討した。その結果, 全体でのパスモデルとライバルの類型ごとのパスモデルを比較すると, 特に基準, 目標が大きく異なっており, 基準では親密性から本人の意識へのパスのみが導かれた。

また, 目標では学習状況の情報からのパスが強い影響

を示しており, 自分とライバルの学習に対する姿勢の高さが, 本人の意識をより高める作用をもたらしていた。これは, 成績が上の相手と自己高揚の比較を行ない, ライバルとの差を縮めることで自己評価を高めようすることを意味する。

そして, 好敵手ではお互いの学習に対する意識の高さが高い程意欲が高まるという結果を示した。基準, 目標とは異なり, 双方向のライバル認知を形成しているため, 相手の意識に影響を及ぼすパスが好敵手でのみ導かれた。ライバルとする相手の側にも, 本人と同様な自己評価維持の意識過程が生じていることの現われであると考えられる。

これらの結果より, 競争意識が高まった結果として, 自分の遂行を上昇させる方略が取られやすいことを意味すると考えられる。

1・8 本研究の目的

本研究では学習場面において, ライバルと認知した相手が競争結果に対する原因帰属や対処方略にもたらす影響について検討することを目的とする。SEMモデルの対処方略は類型ごとに異なることが推測されており, ライバルの存在がもたらす影響も類型ごとに異なることが予測される。そこで本研究では, 太田 (2001) のライバルの類型基準を基に, ライバルを分類して考察を行なう。また, 太田 (2004b) ではライバルが存在する生徒のみを対象としたが, 本研究ではライバルが存在しない生徒にはライバルの代わりに友人を想定させて回答を求め, ライバルと友人の差異についても検討する。

2. 方法

2・1 調査対象

愛知県・三重県内の公立高校 1, 2 年生 486 名 (男子 243 名, 女子 238 名, 不明 5 名) を調査対象とした。

2・2 調査内容

以下の 3 つの項目群から構成される質問紙を作成した。

(1) 生徒の特性に関する尺度

1) 学習態度 (8 項目): 松原・橘川・犬塚 (1985) の開発した日本文学学習意欲診断検査 (FIGHT) の「学習への興味」, 「学習への価値観」, 「学習達成動機」, 「学習の自己効力感」の項目を参考に作成した (例「計画した勉強は最後までやり遂げる」)。

2) 自己意識 (私的自己意識 10 項目, 公的自己意識 7 項目): Fenigstein, Scheier, & Buss (1975) の SCS の邦訳版を用いた (例「自分のことについて深く知ろうとする」)。

3) 自尊心 (10 項目) : 山本・松井・山成 (1982) の自尊心尺度を使用した (例「もっと自分自身を尊敬できるようにになりたい」) .

4) 社会的比較傾向 (能力の比較 6 項目, 意見の比較 5 項目) : Gibbons & Buunk (1999) が作成した尺度を邦訳して使用した (例「自分がしている問題について, 他の人がどう考えているか知ろうとする」) .

5) 本人の成績 (10 段階) : 自分の成績について評定を求めた.

本人の成績以外の項目には全て「当てはまらない (1)」～「当てはまる (5)」の 5 件法で評定を求めた.

(2) ライバル/友人に関する項目

1) ライバルの有無

2) ライバルとの成績の差の認知: 自分とライバルのどちらが成績が上かの評定を求めた.

3) ライバル意識の方向: ライバル意識が一方的か双方向的かの評定を求めた.

4) ライバル/友人の成績 (10 段階) : ライバル/友人の成績について評定を求めた.

5) ライバル/友人の学習態度 (8 項目) : (1) の学習態度の項目をライバル/友人について回答できるように表現を改めて使用した.

6) ライバル/友人との仲の良さ (5 項目) : 相手との仲の良さについて評定を求めた.

学習態度と仲の良さについては「当てはまらない (1)」～「当てはまる (5)」の 5 件法で評定を求めた.

(3) 競争結果に対する帰属傾向・対処方略

学習場面における競争に負けたときの原因帰属と対処について測定した. 競争場面として実力テストを設定し, 競争の内容はライバルと競争している教科・事柄 (ライバルが存在する生徒), もしくは自分が一番他人に負けたくないと思っている教科 (ライバルが存在しない生徒) とした. また, ライバルが存在しない生徒の競争相手は, (2) の項目で回答に用いた友人とした. 競争結果

は「負ける」であるが, 負け方として「大差で負ける」と「わずかの差で負ける」の 2 条件を設定した. したがって, 分析モデルはライバルの有無・類型 (基準・目標・好敵手・友人) ×負け方 (大差・僅差) となる. 場面教示の例を Figure1 に示した.

1) 競争結果が起こる頻度: 場面で提示した負け方が生じる頻度を「ほとんど起こらない (1)」～「よく起こる (5)」までの 5 件法で評定を求めた.

2) 競争結果に対する帰属 (11 項目) : 競争に負けた原因としてあげた項目について, 自分ならどれくらい思うかについて, 「全然そう思わない (1)」～「そう思う (5)」までの 5 件法で評定を求めた (例「たまたま自分ができなかったから」) .

3) 競争結果に対する対処方略 (15 項目) : 競争に負けた後, どのような対処行動を取るようになると思うかについて, 「全然そう思わない (1)」～「そう思う (5)」までの 5 件法で評定を求めた (例「相手と前ほど仲良くできなくなる」) .

3. 結果

3.1 ライバルの分類

ライバルが現在存在すると回答した生徒は 192 名, 存在しないと回答した生徒は 292 名であった. ライバルが存在する生徒を, ライバルとの成績差の認知とライバル意識の方向の項目を利用して, 太田 (2001) と同様の分類基準 (Table1) を設定し, 「基準」, 「目標」, 「好敵手」の 3 類型に分類した. その結果, ライバルが存在する生徒は「基準」21 名, 「目標」80 名, 「好敵手」67 名 (分類不可能 24 名) に分類された. 分類不可能であった 24 名とライバルの有無に関して不明であった 2 名の計 26 名は以降の分析対象からは除外した.

3.2 帰属傾向, 対処方略の分析

帰属傾向, 対処方略のそれぞれについて因子分析 (主

あなたは, ある実力テストでライバルもしくは友人と競争しました.

競争の内容は,

- ・ライバルがいる人はライバルと競争している教科・事柄
- ・ライバルがいない人は自分が一番他人に負けたくないと思っている教科

です.

競争の結果, あなたは 大差で その人 (ライバルもしくは友人) に負けてしまいました.

Figure1 場面の教示例 (大差敗北条件)

Table1 ライバルの分類基準

	成績の差	ライバル意識の方向性	分類人数
基準	(自分が上)～(同じ)	一方的	21
目標	(相手がやや上)・(相手が上)	一方的	80
好敵手	(自分がやや上)～(相手がやや上)	双方向的	67
分類除外	(自分が上)・(相手が上)	双方向的	24

Table2 帰属傾向の因子分析(主成分分解・プロマックス回転後の因子パターン)

項目	F1	F2	F3
第1因子 相手の属性 ($\alpha=.63$)			
9. 自分の能力が相手に及ばないから	.801	-.186	-.135
8. 相手の方が勉強が好きだから	.722	.077	-.064
10. 自分はあまり勉強が好きではないから	.613	.174	.013
11. 直前の相手の頑張りがすごかったから	.496	.051	.361
第2因子 運 ($\alpha=.68$)			
5. たまたま相手の調子が良かったから	.051	.794	-.087
1. たまたま自分ができなかったから	-.128	.751	.016
4. ちょうど自分の体調が悪かったから	.057	.724	-.052
2. 問題が自分には難しすぎたから	.349	.482	.141
第3因子 自分の努力 ($\alpha=.67$)			
7. 自分の直前の頑張りが足りなかったから	-.128	.080	.861
3. 普段からの自分の努力が足りなかったから	-.076	-.066	.812
6. いつも相手は努力しているから	.365	-.144	.556
因子間相関		F1	F2
		F2	.154
		F3	.149
			-.143

Table3 対処方略の因子分析(主成分分解・プロマックス回転後の因子パターン)

項目	F1	F2
第1因子 積極的対処 ($\alpha=.87$)		
2. 勉強に対するやる気が起こる	.839	.025
13. 勉強を頑張るようになる	.837	-.021
9. 次の機会に相手以上に努力する	.805	-.057
6. 勉強に対する興味が湧く	.738	.141
3. 相手を目標とする	.725	.067
14. 次は相手には負けたくないと思う	.700	-.076
第2因子 消極的対処 ($\alpha=.82$)		
8. 相手との距離を置く	.089	.757
11. 勝てそうな相手を探す	.011	.747
5. やる気をなくす	-.206	.695
4. 次からは別の人と勝負・比較する	.126	.694
12. 勉強に対する関心が低くなる	-.257	.693
1. 相手と前ほど仲良くできなくなる	.169	.643
7. 次からはこうした勝負をしなくなる	.010	.584
因子間相関		F1
		F2
		-.128

成分分解, プロマックス回転)を行なった。固有値の減衰状況と解釈の可能性より, 帰属傾向は3因子解 (Table2), 対処方略は2因子解 (Table3)を採用した。分析に際して, 対処方略の項目のうち, 「相手の実力を認める」, 「別に何も変わらない」の2項目は除外された。

帰属傾向の第1因子には, 「相手の方が勉強が好きだから」など, 相手の方が優れていることに帰属する傾向を示す4項目がまとまったため, 「相手の属性」因子と

命名した。第2因子には「たまたま相手の調子がよかったから」など偶然の要素に帰属する傾向を示す4項目がまとまったため, 「運」因子と命名した。第3因子には, 「自分の直前の頑張りが足りなかったから」など自分の努力不足に帰属する傾向を示す3項目がまとまったため「自分の努力」因子と命名した。対処方略の第1因子には, 「勉強に対するやる気が起こる」など学習活動を積極的にこなす傾向を示す6項目がまとまったため, 「積極的対

Table4 帰属傾向・対処方略の平均と標準偏差

	基準(21)	目標(80)	好敵手(67)	友人(292)	F値	多重比較
帰属傾向						
相手の属性	2.68 (0.83)	2.99 (0.81)	2.90 (0.75)	2.91 (0.86)	0.87	
運	2.56 (0.98)	2.34 (0.77) b	2.71 (0.93) a	2.60 (0.84)	3.16 *	a>b
自分の努力	3.97 (0.74)	4.25 (0.75) a	4.11 (0.74)	3.91 (0.86) b	5.00 **	a>b
対処方略						
積極的対処	3.63 (0.76)	3.91 (0.67) a	3.72 (0.84) a	3.25 (0.91) b	15.02 ***	a>b
消極的対処	1.67 (0.65)	1.73 (0.61)	1.62 (0.60)	1.84 (0.67)	2.46 +	

+ $p < .10$ * $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

処」因子と命名した。第 2 因子には、「相手との距離を置く」など対人認知の変化や動機づけの低下などを示す 7 項目がまとまったため、「消極的対処」因子と命名した。

各因子に含まれる項目を用いて α 係数を算出したところ、帰属傾向は第 1 因子から順に .68, .63, .67, 対処方略は第 1 因子が .87, 第 2 因子が .82 となり、ある程度の信頼性は確認された。対処方略を自己評価維持方略と対応させると、「積極的対処」には主に自分の遂行を上げる方略が含まれ、「消極的対処」には関与度を下げる方略や親密度を下げる方略が含まれている。

次に、帰属傾向、対処方略の得点について、ライバルの有無・類型×負け方の 2 要因分散分析を行なったが、いずれの因子についても負け方の主効果は認められなかったため、ライバルの有無・類型のみで 1 要因分散分析を行なった。有意差が認められる因子については多重比較 (Tukey 法, $p < .05$) を行なった (Table4)。

帰属傾向では、「運」への帰属において「好敵手」が「目標」よりも高い値を示した。「好敵手」では実力が拮抗しているため、他の類型よりも負けたのはたまたまであると認知する傾向が強いことが考えられる。「目標」では相手の方が実力が上なので、運に帰属する傾向が低く、自分の努力不足に原因を求める傾向が高くなるといえよう。ただし、全体的に「運」や「相手の属性」に対する帰属よりも、「自分の努力」に対する帰属を行ないやすいことが見受けられる。

対処方略では、「積極的対処」において「目標」、「好敵手」が「友人」よりも高い値を示した。特に競争に負けることが最も多い「目標」の得点が高く、競争に負けても積極的に学習に取り組める姿勢がうかがえる。「消極的対処」では有意傾向の差のみ認められた。全体的に、「積極的対処」の方を行ないやすい傾向がうかがえる。

3・3 帰属傾向と対処方略の関連

帰属傾向と対処方略の関連を検討するために、帰属傾向から対処方略へのパス解析を行なった (Figure2~Figure4)。第 1 水準に (1) の尺度, およびライバル/友

人の成績の認知・学習態度, 仲の良さ, 第 2 水準に帰属傾向, 第 3 水準に対処方略をそれぞれ配置し, 重回帰分析を用いてパス係数 (標準偏回帰係数) を算出した。重回帰分析はライバルの 3 類型および友人 (ライバルが存在しない生徒) の 4 群に分けて群ごとに行なったが, 「基準」は, 「仲の良さ」から「自分の努力」へ有意傾向の負のパスが認められたのみであった ($\beta = -.349, p < .10$)。

「目標」では, 「成績 (本人)」から「運」 ($\beta = .35, p < .05$), 「学習態度 (ライバル)」から「自分の努力」 ($\beta = .36, p < .05$), 「仲の良さ」から「積極的対処」 ($\beta = .24, p < .05$), 「公的自己意識」から「消極的対処」 ($\beta = .31, p < .05$), 「運」から「消極低対処」 ($\beta = .35, p < .05$), 「自分の努力」から「積極的対処」 ($\beta = .51, p < .001$) へ正の影響が, 「相手の属性」から「消極的対処」 ($\beta = .23, p < .10$) へ正の影響の傾向が認められた。また, 「学習態度 (本人)」から「運」 ($\beta = -.31, p < .05$), 「私的自己意識」から「消極的対処」 ($\beta = -.34, p < .01$) へ負の影響が, 「自尊心」から「自分の努力」 ($\beta = -.24, p < .10$) 負の影響の傾向が認められた。

「好敵手」では, 「学習態度 (本人)」から「積極的対処」 ($\beta = .42, p < .01$), 「私的自己意識」から「運」 ($\beta = .34, p < .05$), 「自尊心」から「積極的対処」 ($\beta = .35, p < .05$), 「消極的対処」 ($\beta = .29, p < .05$), 「自分の努力」から「積極的対処」 ($\beta = .32, p < .01$) へ正の影響が, 「意見の比較」から「積極的対処」 ($\beta = .27, p < .10$), 「自分の努力」 ($\beta = .29, p < .10$), 「相手の属性」から「消極的対処」 ($\beta = .27, p < .10$) へ正の影響の傾向が認められた。また, 「学習態度 (本人)」から「相手の属性」 ($\beta = -.41, p < .01$), 「意見の比較」から「消極的対処」 ($\beta = -.31, p < .05$) 「公的自己意識」から「相手の属性」 ($\beta = -.36, p < .05$) へ負の影響が, 「意見の比較」から「運」 ($\beta = -.31, p < .10$) へ負の影響の傾向が認められた。

「友人」では, 「学習態度 (本人)」から「積極的対処」 ($\beta = .37, p < .001$), 「自尊心」から「運」 ($\beta = .17, p < .05$), 「学習態度 (友人)」から「自分の努力」 ($\beta = .29, p < .001$), 「仲の良さ」から「相手の属性」 ($\beta = .15, p < .01$), 「運」 ($\beta = .17, p < .05$), 「自分の努力」 ($\beta = .13, p < .05$), 「相

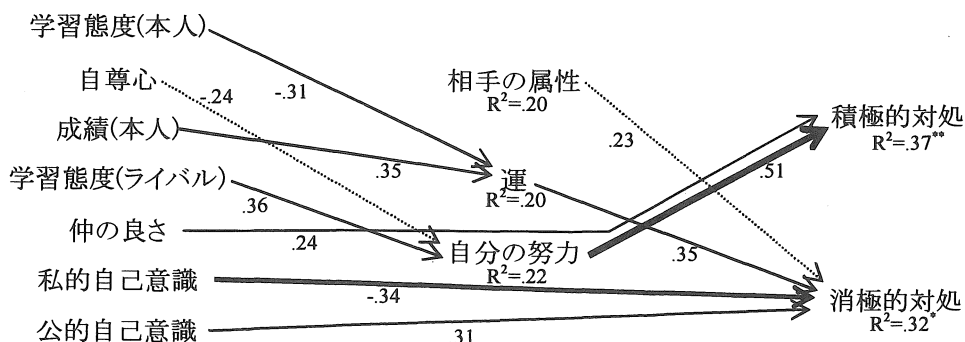


Figure2 帰属傾向から対処方略へのパスモデル(目標)

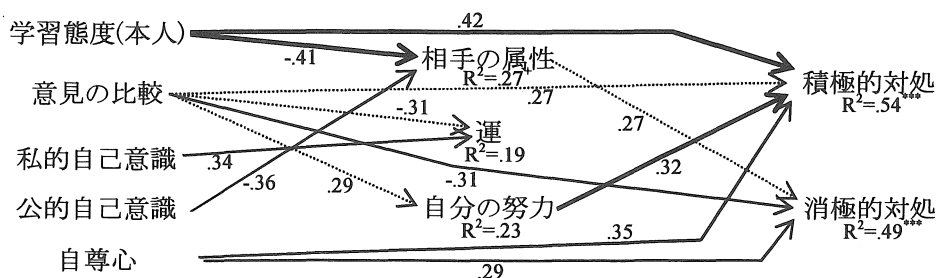


Figure3 帰属傾向から対処方略へのパスモデル(好敵手)

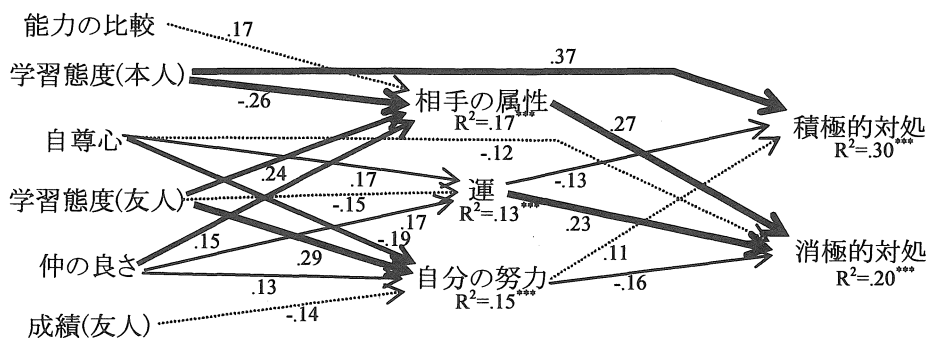


Figure4 帰属傾向から対処方略へのパスモデル(友人)

.....> $p < .10$ -> $p < .05$ -> $p < .01$ -> $p < .001$

手の属性」から「消極的対処」 ($\beta = .27, p < .01$) , 「運」から「消極的対処」 ($\beta = .23, p < .01$) へ正の影響が, 「能力の比較」から「相手の属性」 ($\beta = .17, p < .10$) , 「自分の努力」から「積極的対処」 ($\beta = .11, p < .10$) へ正の影響の傾向が認められた。また, 「学習態度(本人)」から「相手の属性」 ($\beta = -.26, p < .001$) , 「自尊心」から「自分の努力」 ($\beta = -.19, p < .01$) , 「運」から「積極的対処」 ($\beta = -.13, p < .05$) , 「自分の努力」から「消極的対処」 ($\beta = -.16, p < .05$) へ負の影響が, 「自尊心」から「消極的対処」 ($\beta = -.12, p < .10$) , 「学習態度(友人)」から「運」 ($\beta = -.15, p < .10$) , 「成績(友人)」から「自分の努力」へ負の影響の傾向が認められた。

4. 考察

4.1 ネガティブな競争結果における対処方略の比較

SEMモデルを用いた対処方略として, まず「基準」では, 他者との心理的近さを遠くする方略, または始めから心理的に遠い他者をライバルとして認知する方略が予測されていた。帰属傾向や対処方略では友人に対する帰属や対処よりも有意に高い得点は認められなかった。また, 仲の良さの得点は有意ではないが低い値を示しており(「基準」3.15, 「目標」3.10, 「好敵手」3.57, 「友人」3.42), 心理的に遠い他者をライバルとして認知している方略を取っていることが考えられる。そのため,

親密性が高くなると本人の意識に影響を及ぼすことになるのであろう。

4・2 帰属傾向・対処方略に影響をもたらす要因

「基準」以外では、関与度の高さ（学習態度、成績の認知）が帰属傾向に、自尊心が対処方略へ影響を与えており、これは SEM モデルに沿った意識過程が生起していることの現われであるといえよう。目標では運への帰属が消極的対処を高めることが示されており、自分で統制できない原因への対処が消極的対処につながることを表わしている。

「友人」では全ての帰属が消極的対処に影響を及ぼしており（運・相手の属性への帰属は正、自分の努力への帰属は負）、特に消極的対処には統制可能性が影響を及ぼすと考えられる。

「目標」では、ライバルとの差を縮めようとする（自己の遂行を高める）方略を取ると予測されていた。これは、「目標」としてライバルを認知する生徒は自己高揚的な比較を行ないやすいと考えられるためである。「目標」は能力に差のある相手との比較であるが、負けた原因は自分の努力不足に強く帰属し、その意識がより積極的対処に結びついていることが示された。自分の努力に帰属する傾向が高いため、自己高揚的な比較を行ない、自分が努力することで自己評価を維持しようとするという予測が支持されたといえよう。

「好敵手」では、自分の遂行を上昇させる方略を取ることが予測されていた。自分の努力への帰属が積極的対処を高め、相手の属性への帰属が消極的対処を高めることが示された。「目標」ほどではないが、自分の努力不足に強く帰属し、その意識が積極的対処に結びついていた。どちらが勝ってもおかしくない関係であるので、どちらの帰属も可能性として考えられやすい。統制可能な自分の努力に帰属すれば積極的対処が、統制不可能な相手の属性に帰属すれば消極的対処が起こりやすいと考えられる。また、相手の学習態度や成績が本人の競争意識に影響をもたらしていた。学習態度や相手との親密度は高いが、それらを低くする対処方略は取らず、積極的に学習に取り組む姿勢がうかがえるため、予測は支持されたといえよう。また、好敵手では運に帰属する傾向が他の分類よりも高かったが、対処方略には影響をもたらしていなかった。これは、好敵手は実力が同じくらいであるため、競争に負けたことを運に帰属しても、妥当な帰属である場合が多いからではないかと考えられる。

4・3 ライバルとの競争の結果における原因帰属と対処方略

本研究では、ライバルの存在がもたらす影響について

SEM モデルを用いて検討を行なった。「基準」以外のいずれの分類でも、自分の努力への帰属は積極的対処を高め、相手の属性に帰属すると消極的対処を高めることが示された。「目標」ではさらに運に帰属することが消極的対処を高めることが示されており、自分で統制できない原因への対処が消極的対処につながることを示している。「好敵手」では自分の努力への帰属が消極的対処を抑制し、相手の属性への帰属が積極的対処を抑制することが示された。どちらが勝ってもおかしくない関係であるので、どちらの帰属も可能性として考えられやすい。統制可能な自分の努力に帰属すれば積極的対処が、統制不可能な相手の属性に帰属すれば消極的対処が起こりやすいことが示されたといえよう。「友人」では全ての帰属が消極的対処に影響を及ぼしており（運・相手の属性への帰属は正、自分の努力への帰属は負）、特に消極的対処には統制可能性が影響を及ぼすことが考えられる。

従来の学習成績の認知における SEM モデルを用いた対処方略として、相手の成績を低く認知することや親しくなれなくなることで、あるいは学習に対する関与度を下げるといった消極的な対処方略が指摘されていた。しかし本研究の結果を見る限り、たとえ友人であってもそれほど消極的な対処方略は取ろうとしないことが示された。

例えば、「相手を認める」という項目の平均値は 3.57～4.08 の範囲にあったことから、相手の成績を低く認知するといった対処はあまり行なわれないと考えられる。その上でライバルが存在する生徒は、ライバルとの競争結果でネガティブな結果を得たとしても、それを積極的な対処に転換する意識が友人に対するものよりも強いことが部分的（「目標」・「好敵手」）にはあるが明らかとなった。ライバルを持つ生徒は競争が自身の成長のために有効な手段であるという認識が高く、達成動機も高いことも明らかとなっている（太田, 2005）。以上のことから、生徒は、ライバルを持つことで自身を自律的に動機づけ、学習に対して積極的に取り組んでいるといえよう。

4・4 おわりに

本研究では、分類される生徒の人数に偏りが生じたため、「基準」に関して十分な検討が行なえなかった。したがって、「基準」についての検討を加えることが必要となるであろう。

また、ライバルが存在する生徒は、自分の努力に帰属すれば、積極的な対処を行なう意識が強くなることが部分的（「目標」・「好敵手」）にはあるが明らかとなった。これはライバル関係を単なる競争関係の 1 つとして位置づける以外の見方も必要であることを示唆する結

果であろう。対人関係としてのライバル関係の位置づけについても、今後さらに検討を進める必要がある。これにより、望ましい競争のあり方についても重要な示唆が与えられると考えられる。

引用文献

- DeSteno, D. A., & Salovey, P. 1996 Jealousy and the characteristics of one's rival: A self-evaluation maintenance perspective. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **22**, 920-932.
- Deutsch, M. 1982 Interdependence and psychological orientation. In V. J. Derlega, & J. Grzelak (Eds.), *Cooperation and helping behavior*. Academic Press. chap.2 Pp.15-42.
- Fenigstein, A., Scheier, M. F., & Buss, A. H. 1975 Private and public self-consciousness: Assessment and theory. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **43**, 522-527.
- Festinger, L. 1954 A theory of social comparison processes. *Human Relations*, **7**, 117-140.
- Gibbons, F. X., & Buunk, B. P. 1999 Individual differences in social comparison: Development of a scale of social comparison orientation. *Journal of Personality & Social Psychology*, **76**, 129-142.
- 磯崎三喜年・高橋 超 1988 友人選択と学業成績における自己評価維持機制 心理学研究, **59**, 113-119.
- 磯崎三喜年・高橋 超 1993 友人選択と学業成績の関連の時系列的変化にみられる自己評価維持機制 心理学研究, **63**, 371-378.
- Latané, B. 1966 Studies in social comparison: Introduction and overview. *Journal of Experimental Psychology*, **Supplement1**, 1-5.
- 松原達哉・橋川真彦・犬塚文雄 1985 日文化学習意欲診断検査 (FIGHT) 日本文化科学社
- 室山晴美 1995 ライバルとして記述される対人関係に関する一考察 心理学研究, **65**, 454-462.
- 太田伸幸 1999 学習におけるライバルの人物像についての基礎的検討 名古屋大学教育学部紀要 (心理学), **46**, 275-285.
- 太田伸幸 2000a ライバル関係の認知の基準—大学生の自由記述の分析から— 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 (心理発達科学), **47**, 197-204.
- 太田伸幸 2000b 学習におけるライバルの人物像—学習場面において認知したライバルの人物像と関係の認知基準— 日本心理学会第64回大会発表論文集, 1134.
- 太田伸幸 2001 学習におけるライバルを認知する理由の検討 性格心理学研究, **10**, 45-57.
- 太田伸幸 2004a ライバル関係の認知の基準: ライバル観尺度の作成 社会心理学研究, **19**, 221-233.
- 太田伸幸 2004b 学習場面におけるライバル認知に関する研究—ライバルの類型・友人に対する競争意識の比較— 愛知工業大学研究報告, **39A**, 33-43.
- 太田伸幸 2005 学習場面におけるライバルの有無に影響する要因—競争と学習に対する態度に注目して— 愛知工業大学研究報告, **40A**, 47-56.
- Pleban, R., & Tesser, A. 1981 The effects of relevance and quality of another's performance on interpersonal closeness. *Social Psychology Quarterly*, **44**, 278-285.
- 桜井茂男 1992 自己評価維持モデルに及ぼす個人差要因の検討 心理学研究, **62**, 16-22.
- 高田利武 1981 社会的比較過程理論における類似性仮説—その批判的検討(1)— 群馬大学教育学部紀要 (人文・社会科学編), **31**, 275-290.
- 高田利武 1992 他者と比べる自分 サイエンス社
- Tesser, A., Campbell, J., & Smith, M. 1984 Friendship choice and performance: Self-evaluation maintenance in children. *Journal of Personality and Social Psychology*, **46**, 561-574.
- Tesser, A., & Paulhus, D. 1983 The definition of self: Private and public self-evaluation management strategies. *Journal of Personality and Social Psychology*, **44**, 672-682.
- 山本真理子・松井豊・山成由紀子 1982 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, **30**, 64-68.
- White, G. L. 1981 Jealousy and partner's perceived motives for attraction to a rival. *Social Psychology Quarterly*, **44**, 24-30.
- Wish, M., Deutsch, M., & Kaplan, S. J. 1976 Perceived dimensions of interpersonal relations. *Sociometry*, **40**, 234-248.

(受理 平成 18 年 3 月 18 日)